

て下がって来た。とても戦える力もなく、それどころか戦傷死寸前というべきであるのに、軍律厳しく小隊長の特務士官が「何故逃げて来たか！ 死ぬまで守れ、戻れ戻れ、ぶった切るぞ」と軍刀に手をかけているも哀れであった。

盲貫銃創の弾片抜き手術も木陰のカンバスのベッドに傷病兵を寝かせ、手足を縛り麻酔もかけず、軍医が泣き叫ぶ負傷者を荒療治するのを見て、私は生き地獄とはこれかと思った。

山中敗走六〇キロの道中では、旧知の尺八をよく吹く兵曹が、マラリアとアメーバ赤痢で路傍で末期の水を求めているが、私自身も水筒の水も乏しく「後から救援隊が来るから」と嘘をつき、今でも罪作りであったと思っている。

今次大戦もなんとか終わり戦後五十余年、生き残りの戦友と戦友会で語り合う私は、まあまあ幸福であるとう亡き戦友にお礼を申したい。

南の国の抑留 恋飯島

愛知県 森 由治

昭和十五年旧制中学校を卒業した私は、地元の豊川海軍工廠に入廠した。仕事は、工事単価計算の基礎データを作る機銃工事記録員であった。当時は「青雲の志」に燃え、陸軍士官学校を受験するつもりであったので、ここに勤めていては合格の見込みがないから、理屈を言って工廠を辞めさせてもらい、名古屋に出た。

しかし、働かねば生活ができぬから職業安定所に行つたところ、「気象技術要員」のポスターが目についた。魅力は食う心配がない、成績がよければ中央気象台所属の測候技術官養成所（旧制専門学校）に陸軍委託学生として官費入学できるということであった。

昭和十六年三月、第八期「陸軍技術要員」として陸軍氣象部の門をくぐり、第二十五戦隊氣象隊動員下令により、第二十五軍の隷下部隊に入り、大東亜戦開戦

時の気象判断などの重大任務にかかわることとなり、爾後の南方諸作戦に参加することになったのである。

本来なら、満二十歳で徴兵検査を受け、兵士としてあるいは幹部候補生終了後初級将校として戦場にあつたかもしれないし、その結果外地のどこかに屍をさらしたかもしれない。あの一枚のポスターが私の運命を変えたのであろうと、戦後痛切に感じた次第である。

昭和十六年、南部仏印進駐部隊の一員としてサイゴン上陸（私は第二十五野戦気象隊の第一測候班）。その後、昭和十七年一月よりタイからビルマへと進み、九月三十日にはわが気象隊は第三気象連隊とし編成完結。その展開地域は比島、ニューギニア、臺北地区の一部を除き、西はビルマから東はチモール島に至る地域に及んだのである。

私は、ビルマ最南端に展開後、昭和十八年四月進駐当初の駐地サイゴンに復帰することができた。その間には一步誤れば千尋の谷に転落する悪路を器材と共に山路を進撃したし、また空爆、銃撃により九死に一生を得たこともあった。直接、銃砲剣を持って戦闘する

部隊ではないが、我々の気象測候は戦術を越え戦略にも関係する重大な任務であることは肝に銘じていたのである。

昭和十九年に入るとインパール作戦が開始され、当連隊からも第四中隊から二つの挺進測候班が編成された。気象隊は「本年のビルマ方面の雨季は例年より早く河川の水量が急増するので、兵員、物資、弾薬を速やかにチンドウィン河以西に搬出するように」との具申も、軍司令部、辻参謀に軽視され、あの大悲惨事を招いたのである。

その間、私たち大正十一年生まれの者は、徴兵延期願いを書かされ、内地帰還は夢となってしまった。従つて後に現地入隊となり、軍事教練ではだいぶ絞られたが、昭和二十年四月一日上等兵、続いて甲種幹部候補生、八月一日には軍曹の階級に進み中隊配属も決まり、見習士官を目の前にして終戦となったのである。その間、ビルマの奥地、比島、ニューギニアに配属となつたかつての戦友、同期生の多くは終戦を待たずに戦没したのであり、軍隊はまさに連隊なりの言葉を痛切に

感じたのである。そして、我々を待っていたのは、南方抑留の苦しみであった。飢餓との戦い、まさにレンバン島は「恋飯島」であり、次に述べるその体験を通じて、いわゆる「南方強制抑留」、労働の実態を認識してもらいたいのである。

シンガポール脱出

昭和二十年八月十五日、終戦の玉音放送をシンガポール（昭南島）のカトン連隊本部で聞いたが、混信が多くほとんど聞き取れなかった。ひそかにカルカッタ放送を受信した者から聞いたので敗戦は了解できた。直ちに終戦の事務処理に移り、暗号書、機密・秘密書類等と共に不用品等を焼却した。連隊本部・本部勤務隊・材料廠にいた約二百五十人は残置人員約四十人を残して八月二十四日までにシンガポールから立ち退くように命ぜられた。軍隊は誠に連隊で残置人員は器材・資材などの引き継ぎ完了後、天河作業隊として、また後に昭南・ケッペルハーバー等の作業隊に編入された方々は、共に過酷な報復的強制使役をさせられたとのことである。

この先どうなるのか、どこへ行くのか何も判らないまま、道路脇のゴム林で野営をしては、ポンチャケテルからアピアピ等を通過し、マレー半島を北上し、レンガムに到着した。ここで、徹底抗戦に備えて半島中部の山中（ラウブ）で気象中枢業務を続行するため特設された第七中隊と合流し、六百五十余人の集団となった。

さらに北上し、ジョロトンでの生活が三カ月近く続いて、シンガポールから持ち出した食糧は底を尽き、どこから給与を受けたのか記憶にないが、日ごとに空腹感は増大し体力も消耗してきた。加えてたいして重要だと思われない英印軍の作業に駆り出され体力はますます消耗した。

クルアン検問所

十一月十四日、ジョロトン駐留を終え、里川部隊以下検問所のあるクルアンに向け徒步行軍で出発し、十一月二十四日、クルアン検問所に到着した。道路の両側や待機場所に指定されたロープの周りには英印軍の歩哨が巡回していて、時計や万年筆などめぼしい私物

を取り上げていく。ますます敗戦の哀れさが身に染みる。

検問所では、連合軍の戦犯リストと各人の照合を行い、「白」戦犯の疑いなし、「灰色」戦犯の疑いあり、「黒色」戦犯の疑い濃厚、の三組のテントに区分され、私物を含む携行品などを持っていると検査が厳しく、他の隊員に迷惑が掛かるので焼却または廃棄するよう指示があった。そのため開戦以来の大切なメモや写真、現地購入の私物など一切を焼却したり、穴を掘って埋めたりした。今にして思えば、当時の記録や写真などはさして煩わしくもなかったようで、持ち帰らなかつたことが非常に残念である。

中には不心得な者がいて、時計や金の鎖など金目の物を隠し持ち、石鹼などに埋め込んで検問所を通り過しようとする者もいた。これが発覚すると、その部隊は特別検査が厳しくなり、真面目な隊員が大変迷惑したという話も聞いた。目こぼしで助かった時計、万年筆なども没収されてしまう。この検問で連隊長は戦犯の疑いを掛けられ「灰色テント」に留置となったが、

後程疑いが晴れ、レンバン島の部隊に追及された。

検問を通過した者は、クルアンから列車に乗せられてシンガポールに戻され、直ちにトラックでケッセルハーバーに運ばれ、いよいよ無人島へ送り込まれることになる。

レンバン島上陸

レンバン島を当て字で「恋飯島」と書くことについては最近まで知らなかったが、誠に的を得た当て字であると感心させられた。

レンバン島といつてもどこにあつてどんなところか判らない人が多い。幸い私は平成七年八月十九日から二十八日まで、終戦五十周年を記念したレンバン島巡拝慰霊の旅に参加することができた。お陰で今まで知らなかった島の概略が把握できたので、少し島のことに触れてみたい。

この島はシンガポールの南約六十キロにあるリオ群島の一つの島で、当時はオランダ領であった。面積は約百四十平方キロで峇岐島ぐらいの狭い島である。第一次大戦の時ドイツ人三千人がこの島にあげられたが

自然の脅威に打ち勝つことができずに全滅した。マラリアの猖獗^{しょうけつ}地で到底人の住めるところではなかった。支那人もオランダ人も開発に手を着けたが成功せず、隣のビントアン島に移ってようやく定住するようになった、などの話を伝え聞いた。

その島に、南馬來軍、第二十九軍、第三航空軍、昭南防衛軍などが抑留され、北レンパン島、ガラン島などを併せ十三万人もが押し込められた。この島からいつ出られるか判らず相当長期の生活が予想され、しかも食糧は世界的に窮乏していたのでいつ給与の削減を受けるか判らない状態であった。そこで本格的な自活態勢を確立するために開墾が強行されたが、土地がやせていて労力の割には得るものは少なかった。

十一月二十五日、レンパン島千島港に上陸した。完全な島流しである。これでは逃亡も反抗もできない。

島では食うことに追われて、他のことを考える余裕もなく暮らしてきたので、確かなことは自分の目の届くか、皮膚に触れる狭い範囲のことしか判らない。ただし日付は復員船上で戦友と記憶を辿りながら記してお

いたメモによるので、かなり正確であると思う。

十一月二十六日、天王で仮泊、二十七日には隊貨（たいした荷物はなくとも、医薬品類、住まい造りに必要最小限の、鋸、鉋^{ノコギリ}軍刀を折ったもの、農耕用の鋤^{クワ}等）運搬のため千島港に引き返し、二十八日夕刻、天王から一キロほど東進した天下茶屋の部隊宿営地に到着し、ここを「里川台」と呼ぶことにして駐留が始まった。千島港とか天王と言う地名はレンパン島に上陸した部隊（先遣隊が上陸したのは十月十八日ということであった）が、故国を偲^{しの}んで命名したと思われる。まず第一に寝る所を用意しなければならぬ。生活には何より水が大切なので、少し穴を掘っておけば泥水もやがて綺麗に澄んでくるところから、窪地の低いところを住まいにし、各自が持ってきた携帯天幕をつなぎ併せ、シダを掻き集めて毛布を敷き、これでよしと思つて眠りについたのである。夜半から南方特有の猛烈なスコールがやって来て、水は樹間を縫い、灌木を浸し、シダ類の根を洗って滔々と流れてくる。携帯天幕など糞の役にも立たない。有つて無きがごと

くバケツで水をぶっ掛けられたような感じだ。おまけに、下からも水がどんででくる。一晚中座って夜を過ごし、翌日から山の中腹の小高いところに引越した。

住居造り

島には我々が抑留される前は少しは現地人が住んでいたのか、所々に椰子の木とゴム林があった。これらは現地人にとっては貴重品なので、やしの実や葉を取ることとゴムの木を切り倒すことは絶対しないようにと厳命されていた。しかし、湿地を探せば木にならない葉っぱだけのやしがあるところに生えていた。

携帯天幕では雨露が浸げないことが判ったので、この葉を集めてアタップ（細い木を芯にしての葉を二つ折りにしたものを重ね併せて編んだもの）作りに専念した。そうは言っても空き腹で、食糧の受領に千島港まで行く者も必要なので、そんなに手早くできた訳ではない。まったく子供のように読んだロビンソンクルーソーだ。屋根材ができ、十二月四日、携帯天幕の上に行儀よく並べた仮住まいに移った。しかしこれはあく

まで仮住まいで本格的な小屋を作ることになった。溜まってくる水に懲りて、今度は連隊中でも一番高い丘の頂上付近に造ることにした。

負けたとは言え部隊は軍隊そのままの形で残されており、その場所に連隊の編成替えも行われ、本部と四個中隊に区分された。今まで行動を共にしてきた甲種幹部候補生も、九月十五日付でポツダム軍曹になったことを知らされ、私は第三中隊に配属された。

住まい作りは各中隊それぞれで、第四中隊は中隊全員が入れるように大きな家を作ったが、われわれは十五、六人の分隊に分かれて掘って建て小屋を作った。柱や床材を集め作業に移る。すらりとした灌木で親指ほどの太さのものは床や屋根材、腕ぐらいの太さの物を柱や梁にした。アタップ作りのときの太さの物を集めてそれらを縛り付ける。床は、いくらすらっとしてると言っても丸木なので、そのままでは背中が痛くてたまらない。シダをすっかり集めてその上に敷き詰め、携帯天幕を被せて、昭和二十一年一月七日、やっと内務班ができた。

食糧事情

食べ物はレンパン島への先発隊と共に英軍から支給され、港地区に揚陸された米が命の綱である。後続梯団が連日続々と人島するので、当初英軍が約束した追送糧秣は到着しない。一日一人の定量としては軽労働には耐えられる精米二八〇グラムが支給される予定であったということだが、我々末端まで渡る頃には目減りもあり、普通の日の一食分の米は、直径約二センチ、深さ約一・五センチぐらいの缶に一杯弱が目安であった。一回の量を少しずつ減らして置いて、次の配給の前には多めに炊き、食べたような気持ちになって、食生活に変化を持たせようと、気遣いもあった。

「乞食のお粥で言う（湯）ばっか」とか、「目玉入りスूप」と言う言葉が流行ったが、十五人分を一斗缶で炊く、少しでも分量が増えるように、湯を多く入れ米はこれ以上膨れることが出来ないと言うまで煮る。お湯の中に僅かな粥が浮いているので、梅干しが入っているのかと思ったら、自分の目玉が写っていた。言うお粥が飯盒の蓋六、七分目で一食だ。

一日と栄養失調が増えていく。目は落ち窪みどころよりとして、皮膚の色は次第に薄黒くなり、顔や足がむくんでくる。栄養失調のため遂に部隊からも犠牲者が出た。阿久沢上等兵が亡くなったということであった。

主食の減量に加えて、副食はほとんど入手不可能であった。空腹感が募ってどうにもならないので、野草という野草で食べられるものは皆食べた。何もすることは無いようでも、炊事、洗濯、住まいの繕い、糧秣受領等雑用はかなりあった。その中で、野草取りは重要な仕事になり、ゴムの若い葉は塩漬けにして食べると、内地の漬物を思い出させ比較的うまい食べ物であった。塩だけは配給もあったようだがとても足りないのので、部隊で製塩班を編成して、海岸で海水を煮詰め、赤茶けてまだ苦汁の残っているものを配ってくれた。我々の部隊が上陸してからこのころまでの間が一番配給食糧が底をついた時期だったようだ。

やがてゴムの葉は人体に有害なので食べてはいけな
いとの通達があり、シダの葉や、宿舎からずいぶん離

れた海岸までジャングルの間を抜けて海草を取りに出かけたりもした。水や野草については部隊に農学博士がいて、生き物が住んでいる水、虫が食っている葉が比較的安全であることを教えられた。蛇や鼠、むかでのやさそりも兵隊たちの目に留まったら大騒ぎである。

皆に取り囲まれて捕らえられ焼かれて食用に供された。とは言ってもやたらにいるものでもなく、大勢に分けなくてはならないので、骨のかげらか、尻尾の二センチぐらいが口に入れば良いところである。動き回るより、じっとしているほうが体力を消耗しなくて済む勘定だが空腹には勝てない。

夜、横になってもなかなか寝つけないので、早く帰って「どこそこの寿司が食べたい」とか、「あそここのどんはとでもまかった」などと寝物語に喋っているうちに、食べ物の夢を見ながら眠ってしまう毎日であった。

糧秣受領

体力の消耗は極度に足にくる。一週間に一度ぐらいの割で糧秣受領がある。宿舎から三キロほど離れた千

島港か、五キロほど離れた三船港まで取りに行かなければならない。ズック製の背嚢に精米を一杯買ってくるのである。普通の体なら何でもないことだが、栄養失調で足があがらず、おまけに、道は人が通って自然にできたもので、曲がりくねっており、連日のスコールで泥濘と化し、その滑りやすいこと天下一品である。

しかも、ところどころの木の根が露出している。杖をつき、とぼとぼと歩く列は誠に情けない姿である。少し歩いてはつると滑ってスッテンコロリン。あげたと思った足はあがらず、木の根や小さな石ころに躓いた。わずかな木の根が踏み越えられず、しかも倒れるとなかなか起き上がれずしばらくは動けないので、途中で休み休みして、やっと本部に辿りつくありさまであった。

道路作業

島での交通手段は船便が頼りで、少しでも宿舎の近くに栈橋があれば糧秣受領も楽になる。今ある道路は道路とは言えない獣道で、これを道路らしいものになければならない。また、栈橋ができれば、そこから

の道路もつくらなければならず、作業隊に回れば少しは配給が増量されるということである。作業は道路作業班のほか、病院建設班、製塩班、農耕班、漁労班などいろいろあったが、われわれがお世話になったのは製塩班だけで、農耕班・漁労班の恩恵を受けた覚えはない。

私は道路班に回された。部隊の宿舎から直接海岸に出る民安街道作りである。昭和二十一年一月四日、作業班の仮宿舎や道路作りの材料集めから始まった。低湿地が多いのでいくつもの土橋を作らなければならず、満足な道具もなしに木を切りだし、杭を打ち、土を運ぶ仕事は重労働だ。ここは海岸なので海に入って海藻の根を取って食べる。水仙の葉のような海藻の根がワサビのような形をしていて、名前も判らず味も無いような代物だがわれわれはそれを「海ゴボウ」と呼んだ。腹に溜りさえすれば一時の空腹感を押さえることはできる。作業用の増食だと言って徴びた日本軍の乾パンが渡され一同ちよっとだけ元気が出た。

道路作業が一カ月近く続き、作業も終わりに近づく

と、民安からの糧秣受領も始まり、沖合を綺麗な船が航行するのも見られた。月明かりに誘われ二、三時ごろ目覚め、海を眺めれば望郷の念に襲われた。

レーションの支給

これより先、十二月十日を第一回目として米軍の口糧が支給されるようになった。いわゆる「レーション」と名付けられた携帯食糧である。日本軍の乾パンとは比べ物にならず、一食ごとにアルミ缶に詰められ、一日分が朝・昼・晩の三缶一組のセットになっている。中のオートミールとかチョコレートとかキャンデーとか、その一つ一つが綺麗な包装紙に包まれていて、ラックキーストライクという煙草まで入っている。

誠に結構な品物だが、難を言うくと、一食分を一日分にしなければならぬ。カロリーやビタミンは良いとしても、空腹感を満足させることはできない。ましてや、長い間口にしたことも無いおいしい代物である。おやつ感覚で一食分ぐらいペロリと口に入ってしまう。後の二食はお湯だけ飲んで、何も食わずに我慢してゐなくてはならない。

さらに参ったことは、一週間も二週間も便所に行きたくない。繊維質を取らないと、かすが少しも残らないので、排便が大変だ。尻の穴が痛くてたまらないが、いくら力んでも、いつまでも出てくれない。一列に溝のような穴を掘った便所は満員で、やっと出てくるのは豆粒状態の兔の糞のようなものが二、三粒だけである。

大豆の配給があつたときは、胃が弱つていたためか、いくら水を多くして柔らかく煮ても少しも消化せずに、下痢患者が続出し、下痢にならなくても食べた大豆は胃と腸を素通りして粒のまま便所まで直通だった。

ただ、レーションの空き缶や包み紙はいろいろなものを利用してきて大いに助かった。包み紙には防水のため臘がびっしり塗つてあつたので、それをはがして小さな空き缶に溜め、木の皮の繊維を芯にすれば結構うそくとして使用できる。

帰還の喜び

島生活にも慣れてくると、器用な者も不器用な者も、それなりに暇を見つけてはいろいろな身の回り品を作っ

た。また相互慰安のために劇団が編成され、二月二日に我々の部隊からも、最後まで離さなかつたバイオリンを持った予備役の大尉を長とする数人の劇団員が三船港方面に出かけていった。英軍の軍医少佐が衛生状況の視察に来たという話も聞き、少しでも食糧事情が良くなるかと思つた。

三月ごろになると帰還間近というようなデマが飛び、一喜一憂するが、そのうちにピタリと帰還の話は出なくなつてしまつた。新たに建築班が編成され、宝港の倉庫の建設が始まつたということは、まだ何年かはこのような生活が続くのではなかるうかと思つたと憂鬱になつた。

道路作業も進んで、天王ロータリーまではジープが走れるようになり、四月十六には初めて荷車を引いて千島港まで糧秣受領に行つた。農耕班の努力でタビオカも根付き、少しは食糧の足しになるかと思われたが、悲しいのか、嬉しいのか、これを口にすることもなく復員船に乗ることになった。

四月十七日に我々の部隊では、最初の内地帰還者が

宿舎を後にし、四月二十二日になると第二陣六人が宝港に向けて出発した。五月二日、里川部隊（我々の部隊）は第九梯団として内地に帰還することが決定したので四日は真崎閣下に帰還の申告をし、五日に軍司令官石黒中将の見送りを受けて帰国の途に着いた。

「帰還」。それは抑留者全員の夢にも忘れたことが無い悲願であった。このことのためにいまだ経験したことのない極度の空腹感に耐え、道を造り、畑を開墾し、食糧を運んだ。常にいつ祖国に帰り着くことができるかということが焦燥と希望であった。

申し訳ないが、不幸にしてこの地に斃れた一二八人の骨を残して、我々はリバティー号に乗船することができた。